

タンチョウの一年

タンチョウは日本語で丹頂（たんちょう）と呼ばれるように前頭部に赤い皮膚の斑点が付いています。世界に約 2750 羽しか残存していないとされています。シベリア東部と中国の東北部の一部、そして北海道東部に生息しています。江戸時代（1603-1868）には西日本においても発見されていましたが、明治時代（1868-1912）に乱獲によって絶滅したとされていました。しかしながら、1925 年に 10 数羽が釧路湿原で発見されました。この希少な種の保護のために直ちに保存計画が実施されました。2006 年までにその数は 1,000 羽以上まで増えました。

11 月頃から 2 月にかけての寒い期間、ツルたちは凍結した川辺に巣くいます。この地の冬はツルたちに厳しい環境を作り、時として、凍結した湖や河川でエサを見つけることが出来なくなります。そのような状況においては、多くは人間によって餌付けされるエサ場に集まります。

2 月頃になると求愛が始まります。好みの相手を見つけるため、オス・メスのツルたちが互いに顔を合わせて美しい求愛ダンスを興じます。共に頭を高く掲げ、翼を広げて、鳴きながら空中を飛び跳ねます。多くの熱烈な愛鳥家がこの「ツルダンス」を目撃するために釧路近郊の雪原地に集まります。3 月中頃、ペアとなった 2 羽は湿原の枯れアシによる軟らかい巣を作りながら共に産卵の準備を始めます。円状で真ん中にくぼみのあるおおよそ 30-50 センチの深さで 160-200 センチ幅の巣です。

タンチョウは、3 月から 4 月の間、通常 1 回で 2 個の卵を産みます。楕円形の卵で長さ 10-12 センチメートル、幅 6-8 センチの大きさです。通常サイズで 230-240 グラムあります。殻はアシの同じ薄茶色で様々な大きさの違う斑点に覆われています。4 月から 5 月にかけて、オス・メスで交互に卵を抱きます。平均的に、1 日に 4 回場所を変え温める場所を確保しながら卵を転がしています。5 月に入って、卵を抱き温めだして 28 日目あたりで雛が殻を突き破ります。完全に孵化するために 2 日間ほど要します。孵化したての幼鳥はふわふわのキャラメル色の羽を持ち、目も開きすぐに歩き出します。

6 月から 10 月にかけて、親鳥たちは食欲を取り戻します。彼らはコイ科などの小魚やザリガニやミミズや昆虫を漁ります。雛たちは生後数日で自らのエサの確保を始めます。成長に従って、貝類やカエル、どじょう、フナ、コイやウグイを、食べ出します。生後 3 か月を過ぎると、親鳥と同様の食習慣となり、主に昆虫や水生動物、魚類、ネズミ類や両生動物などを食します。

子供のタンチョウの成長は早く、わずか生後 3 か月で大人のサイズに到達します。この頃には翼を動かす運動を始め、100 日目ではほとんどのツルは飛べるようになります。生後 10 ヶ月間程度までは親鳥の側に居続け、次の繁殖時期まで一緒に過ごします。この時期に茶色の翼は次第に黒く変化します。頭の赤い斑点は 2 歳あたりまでは現れません。繁殖が可能になるまでにおおよそ 3 年から 4 年かかります。